

明治の女ゴ写真屋 矢川姉妹 やがわしまい

「ミキちゃん、早く行こう。また始まったよ！」

「姉さん待って、いま行くから！」

ミキは、今まで使っていたままごと遊びの道具をほったらかしにして、れんの後を追いながら、一軒おいて隣りの田井の家へ走っていった。田井の家の庭では、たった今始まったらしく、主人の晨善あきよしが三脚のついた四角な写真機を構え、妻のしうは、ピカピカに光る反射板を周りに立てていた。「ああ、れんちゃんにミキちゃん。これから始まるから、少し離れて見ていなさいね。」

しうに言われて姉妹は無言でこっくりうなず頷くと、邪魔にならぬように一歩後ずさりした。庭の真ん中には、山高帽かぶを被り、口髭くちげをはやした中年の男が胸を張って椅子に座っている。

「まだかね？」

「はい、今しばらくお待ち下さい。あの雲が切れたら始めますから。」

「なんだか、肩がこってきたなア。」

さつきから男は緊張しながら、しきりに鼻の下の髭を撫なでて形を直していた。

「では、そろそろ始めます。いまレンズの蓋ふたを取りますから、暫しばらくはそのまま動かさないで下さい。」

晨善がこういいながらカメラの蓋に手をかけると、男はいよいよ身を固くし、まるで親かたきの敵にでも会ったように、写真機のレンズをカッと睨み返した。

日本に写真機が渡来したのは、幕末の頃、長崎を経て入ったのが最初だといわれるが、この頃、横浜や函館に入港し上陸した外国人も、写真機を持ち込んだようだ。一八五五年（安政二）に松前や函館地方を旅行した弘前の画人平尾魯仙は、その見聞記『洋夷茗話』よういめいわに、初めて見た写真機について次のように記している。（読み易く現代文にした。）

「これは一種の鏡である。これは箱の中で物を写すものだ。箱は丈たけが二尺（六十糎センチ）、幅が一尺五、六寸（四十五糎）ほどで、上下に一面ずつの鏡があり、日本のノゾキという物に似ている。これに写し鏡（原版）を入れる。これは四十五糎と四十糎くらいの物で、先ず写すべき人を正面に座らせ、手足を動かす事を禁じ、暫く写してこの鏡を引抜くと、その人の影が鏡面に留まり、顔は勿論衣服の織目おりめまではつきりと写る。また日が過ぎても影は消える事はない。絵師はこれを手本にして絵を画くという。人に限らず、山や河、海の景色も同じである。不思議なのは、写そうとする物の形だけがうつり周囲の物は写らないことだ。また、この鏡に写されると早死するとか、写った影は血にな

って消えるなど、この鏡は切支丹の魔法だとの噂もある。」

魯仙は、写真機の仕掛けについて驚きを込めてこのように書いているが、確かに当時の人々は、「これは、キリシタンの魔法だ。」と、驚き怖れたに違いない。しかし、物を正確に、しかも早く写すという写真のすぐれた性能を重くみた人達は、是非その技術を取り入れようと考えた。津軽藩でも、藩士の中から田井隼人はやとという武士を選び「写真術を修業してくるようにな。」と命じた。だが、その時すでに六十歳になっていた隼人は「私はもう年ですから、写真の修業は息子の市之丞いちのじょうにさせて頂きたい。」とお願ひし、長男の市之丞いちのじょう（のちの晨善）を推薦した。こうして田井市之丞は、藩命によつて写真術修業のため、東京方面へ出かけた。一八六九年（明治二）の秋の事である。

一八七一年（明治四）、廃藩置県となったのを機会に、田井は弘前へ帰ってきた。そして東京で学んできた技術を生かし、下白銀町四番屋敷の自宅に、県内最初の写真館を開業したのである。矢川家は、一軒おいて隣りの五番屋敷であった。

姉妹の父蕃寛よしひろは、長坂町の工藤長太の二男であるが、矢川文一郎の養子となつて矢川姓を名乗つたのである。子供は、れん、、蕃徳よしのり、ミギ、蕃栄よしえいの四人があつたが、一八七四年（明治七）六月、長坂町から下白銀町五番屋敷に移った。この時、れん、は十四歳、ミギが七歳で丁度七つ違いの姉妹だった。れん、とミギの姉妹は、その頃珍しかった写真に大変興味を持ち、何かというと田井写真館を覗のぞきに走っていたのである。それというのも、当時の写真は、すべて自然光による撮影をしていたので、室内ではなく戸外で写していた。客がくると庭に椅子を持

ち出し、周囲に反射板を並べて光を集めて撮影するというように、大層大仕掛けな準備が必要だった。雨降りときは無論、空が曇っていても撮影が出来ない。電気照明のない時代だからそれも止むを得ない事だが、このため田井家で撮影が始まると、近所の人達は、珍しいその撮影風景を見るためにゾロゾロと集まったのである。そのなかで一番熱心だったのが、れんとミキの姉妹であった。

姉妹の父蕃寛は、とても進歩的な人で、この時代には珍しい事業家でもあった。廃藩置県で禄を失い、途方にくれている多くの士族達をみて、これからは、時代に合った新しい仕事を見つけないと考え、日本の各地を回って研究をした。その結果思いついたのはマッチの製造だった。蕃寛は、早速その仕事に着手した。日本でマッチの製造が始まったのは、一八七五年（明治八）に東京に出来た東京新燧社しんすいが最初だが、ついで同七六年には函館でも製造を始めている。

蕃寛が「矢川マッチ」をはじめたのは一八七七年（明治十）頃だから、日本でも相当早い時期にマッチを製造した事になる。

蕃寛は下白銀町の自宅に工場を作り、女工七、八人を雇ってマッチの製造にあたっていたが、何度も小火騒ぼやぎがあった。この当時のマッチは、摩擦によって発火するので、ちょっとした振動や摩擦でも発火したらしい。このため家族の強い反対にあって、蕃寛は遂にマッチ製造を続ける事を断念した。

蕃寛は新しい事業として「写真屋」を考えた。東京や横浜の先進地を巡ってきて、写真についての知識もあったからだだった。しかも田井

写真館の様子も見ていたし、れんとミキの姉妹が写真に興味を持ち、時には撮影の手伝いもしていた事も知っていた。また長男の蕃寛は、当時東京で郵便技手として働いていたが、時々上京してくる父の話から姉妹の話聞き、写真館の開業には賛成していたのである。こうして写真館開店のハラを決めた蕃寛は、まず姉妹を連れて上京し、東京や横浜の写真館を見学させた。このとき蕃寛は横浜の外人商館から写真機一式を購入し、また東京にもどった。東京にもどって当時高名な江崎写真師から、薬品の調合処方を書いた「秘伝書」を、当時としては大金の五円を出して譲り受けると、これで一切の準備が整った。一八八〇年（明治十三）の暮の事である。

弘前に帰った親娘は、早速、田井写真館に出かけて、開業についての相談をした。これまで世話になっていた娘達が、すぐそばで同じ商売を始めるのだから、一応その許しを得ねばならぬと思ったからである。ところが田井家では、姉妹で写真館を開業するのを自分の事のよう喜び、材料の購入や注文などについても一緒にやってくれる事を約束してくれた。こうして、一八八一年（明治十四）れんとミキの姉妹は、下白銀町の自宅に「矢川写真館」を開業したのである。れんは二十一歳、ミキが十四歳だった。当時弘前では、写真館も珍しかったが、矢川は「女ゴ写真屋」として評判になった。

開業して最初の撮影のとき、写真機を構えたが、緊張してぶるぶると手が震え、どうしてもシャッターを押せない。後ろで心配そうに見ていた父蕃寛がそれを見て、「やれ！」と大声で叫んだので、そのはずみでシャッターを切ったという。

姉のれんは、眼疾のため視力が弱かったので、撮影は専らミキがあたった。れんは主として薬品の調合や、暗室での現像・焼付けの仕事を担当した。若い姉妹二人が力を合わせて始めた「女ゴ写真屋」は、評判も成績も上々だった。これもみな田井夫婦の協力があつたからだった。とくに晨善の妻は、姉妹を自分の子供のように可愛がり、技術的な面でもいろいろ指導してくれた。

姉妹ではじめた女ゴ写真屋、はじめは物珍しさもあつて大勢の客が押しかけたが、どうしたものか急に客足がおちて来た。出来た写真をみて不平を洩らす客が多くなったためである。昔は、種痘がなかったので天然痘に罹る人が多く、たとえ治っても顔にその痕が点々と残つた。いわゆるアバタ面の人が多かった。その頃の写真は太陽の光の下で撮るのだから、顔の凹凸や陰影がはっきり出て、余計その痕が目立つのだった。

ある日、田井しうが訪ねてきた時、ミキはつい愚痴をこぼした。

「先日もあるお客さんに『これは、オラの顔ではない。』と怒鳴られ、出来た写真を突っ返されたんですよ。」  
これを聞いたしうは、

「それはね、修正をすればいいの。それじゃ私が函館で習って来た修正術を教えるから、早速試してごらんなさい。」  
こう言つて励ましてくれた。研究熱心なしうは、函館まで出向いて、写真修正術を習得してきていたのだ。修正術というのは、原板を特

殊な鉛筆でなぞってから焼付けすると、顔の凸凹やキズの痕が消え、なめらかできれいな肌に写る。これだと、アバタ面やニキビ面の人もきつと満足するだろう。器用なミキは、しうが教えた修正術を会得し、早速それを仕事に用いた。一方、生まれつき身体の弱かった姉のれんは、父と共に東京の蕃徳のところで暮らす事になり、矢川写真館はミキ一人で経営する事になった。

日清戦争（日本と中国の戦争）が終わって国内の景気が良くなると、写真館も多忙になり、ミキ一人の手にあまるようになって来た。そこで、婿養子を迎える事になった。婿養子にきたのは、川端町の岩川友弥ともやという人である。友弥の兄は友太郎といい、東京帝国大学で生物学を修め、わが国貝類学の草分けとなった岩川友太郎（別の項を参照）である。

二人の結婚は一八九七年（明治三十）の春。時に友弥は二十四歳、ミキが三十歳と姉さん女房であった。早速ミキは友弥に写真術を教えた。元々画家であった友弥は技術の習得も早く、修正の仕事はミキ以上の腕前となって仕事を助けた。こうして、夫婦二人が力を合わせて店の経営にあたったので、矢川写真館は益々繁昌していった。

第八師団が弘前に設置される事になり、市内には多数の建築業者が入って活況を呈して来た。この頃、東京にいたミキの父や姉が弘前に帰ってくる事になった。東京の自宅が火事に遭って全焼したためである。父とれんが帰ってくるといっているので、ミキ夫婦は下白銀町の家を引き払って分家する事になり、本町一丁目の角（現東北電力弘前営業所の一隅）に店を新築、移転する事にした。れんも下白銀町で「矢川写

真館」として店を続けるため、ミキの方は「M矢川写真館」を名乗る事にした。一九〇三年（明治三十六）のことである。M（エム）は、ミキの頭文字をとったもので、これは友弥のアイデアだった。こうして、弘前には、矢川の女ゴ写真屋が二店出来た。

「M矢川写真館」が開店した翌年、日露戦役（日本とロシアの戦争）がおこり、友弥も軍に召集されて戦地に送られ、ミキはまた一人になった。が、ミキは、留守を守りながら、まえにもまして女ゴ写真屋として懸命に働いたのである。

一九〇八年（明治四十一年）M矢川写真館で、当時としては珍しい、夜間撮影を始めた。同年二月二日の新聞に「市内本町一丁目（朝陽小学校向い角）写真師矢川友弥氏は、今般夜間撮影を開始したり。昼間業務の多忙なる人、若くは白昼他人に見らるるをはばかりる人等の為には頗る便利なれば、繁昌請合いなり。」と紹介された。この夜間撮影は、友弥がいろいろ研究と実験を重ねた結果成功したもので、閃光粉というマグネシウムの粉に電極を通して放電させるという方法だった。日本で夜間撮影に閃光器を用いたのは、一九一二年（大正元）の頃といわれる。それより三、四年も前、すでに弘前の矢川写真館で閃光器を使っていたのだから、これは日本の写真史上特筆すべきことである。

「夜、暗いところでも写真が写るそうさ。」という評判で、新し好きの客が大勢訪れた。だが、これを妬んだ市内の同業者は「自然の光線があるのに、人工の光を用いるとは、神への冒瀆である。」と非難したという。しかし新聞は閃光器を用いて撮った実際の写真を載せ「この



閃光写真の鮮明なるは、昼間の撮影と毫すこしも異なる処なし。」と宣伝してくれたので、益々人気をよんだ。この頃になると、県内の写真業界にも大きな変動があつた。弘前に県内初の写真館を開いた田井は、一九〇一年（明治三十四）に東京へ移つたが、その後開業した店を含めると次の六店になつていた。

本町 神写真館（神忍・坪田寿）

〃 M矢川写真館（矢川友弥・ミキ）

下白銀町 矢川写真館（矢川れん）

植田町 齊藤写真館（齊藤篤一）

瓦ヶ町 小西写真館（小西吉十郎）

元長町 長谷川写真館（長谷川誠）

一九一八年（大正七）、ミキ夫婦は、店の拡張もかねて繁華街である代官町へ進出した。この時ミキは、店の前に門を建てた。生家であり、明治十四年に姉のれんと力を合わせて開いた下白銀町の矢川写真館には、古めかしい門があつた。生家を出て独立してからもう十数年――ミキにとつて、門のある家に住むのが長い間のユメだったのである。門を建てこれで念願を果たしたと喜んでいたが、間もなく災難にあつ

た。一九二八年（昭和三）の大火である。四月十八日、富田町から出火したので「富田の大火」ともいわれるこの火事は、土手町、松森町、代官町などを総なめに六一〇戸を焼失した。つぎつぎに火が燃え移り、荷物を持って避難する雑踏の中に立ったミキは、家の門が炎に包まれていく様子を無念そうに眺めていたという。

友弥とミキの間には、蕃治よしはる、友治ともはる、テイ、友三ともぞうと四人の子があつたが、いずれも写真に関係のある仕事につくか、写真を仕事にする人と結婚した。長男の蕃治は早く亡くなったが、二男の友治は、第二次大戦後青森市に「矢川支店」を開き、代官町の店は、三男友三が引き継いで現在に至っている。

友弥、ミキの夫婦は、昭和十四・五年、七十歳をすぎるまで、スタジオに出て写真師として仕事をした。そして、三男の友三に、自分たちの経験を語りながら、「写真屋は眼を悪くするから、眼を大事にしなさい。」とアドバイスしたという。なかでも友三は母ミキから、

「写真屋は、芸術家だと思つてはいけない。」

といわれた言葉が、強く心に残っているという。芸術家ぶらずに、技術家として商売に励みなさい、という事であろう。

病弱のため、一生を独身ですごした姉のれんは、弟子の協力を得て下白銀町で写真館を続けていたが、一九四五年（昭和二十）二月十八日、八十五歳で亡くなった。また代官町で営業していた分家のミキも、姉の後を追うように、同年七月二十日に亡くなった。七十八歳だった。

れんとミキは弘前は勿論、県下に「女ゴ写真屋」として名を知られた姉妹である。明治から大正、昭和にかけて、数多くの人々の写真を撮ってきた二人に、なぜか本人の顔写真がない。ミキは、幼い頃天然痘を患ったため、薄いアバタが痕となって顔に残っていた。そのため、他人の肖像写真は撮ったが、自分の写真は一枚も撮らせなかったという。また眼疾があつて、病弱だったれんも、おそらく同じ理由で撮らせなかったのだろう。

現在、れんの墓は新寺町円明寺に、ミキの墓は西茂森町の鳳松院ほうしよういんにある。

**参考文献** 船水清『青森県の写真事始』一九七七年（昭和五十二）北方新社

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一三九・一四九頁